
林檎と明滅

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

林檎と明滅

【Nコード】

N3496N

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

夢ってどういう感じのお話です。

寝ながら男は夢を見ていた。

林檎が画用紙の中から姿を現して、包丁で一刀両断されてしまったのだろうか果実を頭にする。だが果実は腐っていて食べられるものには見えない。臭いも悪い。そう思った男は一人呻いた。

「俺はこんなものはまずいと思う」

すると画用紙に入った腐った林檎はもじやもじやとした昆布のよなものになってしまいい、画用紙の中でしばらくの時間もじやもじやとするようになった。男はしばらくそれを、何だか心地良い思いになりながら眺めていたけれど、それだけじゃ我慢が出来ないようになってしまった。

「昆布、の、もじやもじやあ」

男は画用紙にやつれた手を伸ばし、己すらも長方形の世界へと放り投げてしまいたいと願った。事実、その時の男の表情は活気に満ち溢れていた。そして、男の願いは現実には叶って、一人彼は画用紙の世界へと踏み入れた。足から、胴体、胸へ、そして顔と頭を。

「昆布、の、もじやもじやあ」

男はしばらく画用紙の中で、ふわふわと浮かびあがって楽しんでいた。

すると、向こう側から林檎が歩いてきて、「これは俺のものじゃ」と言いながら昆布を頭に被った。そしてさらに男の後ろ側からは違う野菜、つまり、じゃがいもがたくさん現れて、通り過ぎた。

「どうなるんだろう」

男が窺っていると、昆布を被った林檎に、じゃがいもは下からくっついて、身体になった。

林檎の顔。昆布の頭。ジャガイモの胴体。そしてきゅうりが何処から現れて、それが手足となった。

「昆布と林檎とジャガイモときゅうり、かあ」

男はその勇ましい、何と言っていいやらわからない奇妙な人型を眺めて、呆然とした。

「ああ、すごいなあ」

よくもまあ、全身バラバラの野菜なのに一つになって動けるものだなあと感心しながら、男は自らの佻しい身体を見て、ため息をついた。

「俺ってば……」

男は空しいとばかりにため息をもう一度ついた後、野菜の踊りを眺めるために体育座りをその場でした。座ったところは何時の間にか草原で、何で、草原なんだろう、と思って顔を上げると、自分が緑豊かな丘に座っていることに気が付く。

彼は潤い豊かな草原から、その下方にあるオレンジ屋根が多い街々を見下ろした。整って作られている街々は一つの調和で、それを見下ろすことの出来る潤い溢れる草原で横たわるのは、なんて気持ちが良いのだろうと男は、先程はため息をついていた癖に心地よいまどろみに浸る。

野菜たちは男の横あたりで、踊ってる。何だかよくわからないが、キュウリが一番躍動に溢れていて、ジャガイモはあまり活発でないということは、動きの頻度の違いで理解できた。野菜ごとに性格も違うのだなあ、と考え、いやそりゃジャガイモは動きづらいか、身が詰まってるもんな、とかいうことも考えながら見ていた。林檎は相変わらず赤くて、昆布はわしゃわしゃ、あるいは、もしかもしゃ。「あなたも一緒に踊りますか？」

林檎が話しかけてきた。男は退屈を紛らすために頷き、立ち上がった。

そして野菜と楽しく、踊り続けた。

随分と長いこと踊り続ける内に、下方にあったオレンジ屋根たちの調和が、踊る前までは美しい眺めだったというのに、崩壊を始めていた。様々な色にそれぞれが明滅していて、オレンジの次に青へ

変われば緑青にも変わり、蘇芳にも変われば若草にも変わる。

「点滅してる、点滅！ 調和が乱れてるよ、野菜さん！ 俺、役立たずの無能男だけど、今まで世の中でろくに生きてこなかった屑だけど、何か役に立てることってないんですかね」

男は野菜さんに、ステップを踏みながらだが、切迫した様子で話す。街は滅んでしまうのではないだろうか、自分はこんなことをしている場合ではないのではないだろうか。男はそうに考えて、踊りを止めたいとすら思った。だが、野菜さんのキュウリの部分が男の手のひらを力強く握り締めていて、離そうとしない。男が困っていると、野菜の林檎の部分が答える。

「僕たちは何時だって滅びるのを眺めることしか出来ない。気が付くのは滅びてからが大概で、人は大切なものが消えた時に、はじめてそれを大切だったと認識することが出来る。だから、大切なのは滅びることそれ自体なんだよ。滅びが、たいしたことのない存在を、大切な存在へと変化させているんだ。滅びが大切なものを世界に作り出すんだよ」

林檎はそこまで言うてからため息をついた。男は何を言えいいのかわからなかった。

じゃあ、滅びるのを見ていろっていうのだろうか。

男はそう考えた。

「じゃあ、俺は踊ります。無意味かもしれませんが」

林檎は笑った。

「それがいい。人は、無意味なことの連続を繰り返すことで、いつかは滅びるんだよ。滅びたときに初めて、人間も意味ある存在へと変化する。人間の滅びは、死」

そうなのだろうか、納得していいのだろうか。男にはわからなかった。わからないで考え込んでしまうせいで、時折、野菜の足を踏みつけてしまう。足はキュウリなのでもげてしまうが、すぐに足はもげた部分を回復させてしまう。だから、男は何回も足を踏みつけてしまったが、野菜はずっと踊りを止めないで、男と踊り続けてく

れた。

そんなことをやっている間にも街は明滅を繰り返し、何時の間にか、真つ黒な雪が、街に降り注いでいた。

「綺麗でしょう？ 黒雪というのも」

林檎は男に微笑む。男は戸惑って、あまり綺麗だとは思わなかったが、

「ええ、まあ、はい」

とだけ相槌を打った。その戸惑いを見破ったのだろうか、野菜は男に向けて、せせら笑うような表情を浮かべた。

それからしばらく、彼らは無意味な踊りを続けて、滅びを見送っていた。

街は黒い雪に塗れ、どんどんその姿形を漆黒に落としていた。

だけどそれでも、男と野菜は、踊り続ける。腹が減ったときには、野菜が男に、自らの手足を食べさせた。時には顔も食べさせ、髪の毛も食べさせた。男はありがたいたいと思いながら、毎日毎日、食しながら無意味な踊りを続けた。

そうするうちに、街は漆黒の海となり、それはまさしく、滅びた姿と言って差し支えはなかった。

だけど、それが大切な存在だとは男には思えなかった。ただただ空しいだけじゃなかるうか、と男は、その下方の景色を眺めながら思う。オレンジに統一されていた調和の方が、ずっと大切な存在だったような気がする、と。

「これでよかったのでしょうか」

男は久しぶりに踊ることをやめた。林檎も踊ることを強制させず、一緒にやめてくれた。

「これでよかったのでしょうか」

男は漆黒の海を眺めながら、体育座りをした。

そして、林檎へと顔を向けた。隣にいる、林檎へと顔を。

「あつ」

男は驚いて口をあんぐり開いてしまった。

林檎何時の間にか、腐ってしまった。男はなんて声を掛けていいのかはわからなかった。だから無言のまま林檎をしばらく見つめる。そのうち、林檎の方から声を上げた。

「街が滅びるように僕も滅びる。僕は滅びることが恐ろしかった。だから滅びることを美しいこととすれば、全てを忘れて踊り続けることが出来た。だけど、漆黒の海は、悲しいね。悲観な気持ちにさせられてしまうね」

林檎はそのまま滅びて朽ちてしまった。

地面に倒れ、野菜全てが滅び腐ってしまった。男は悲しいというか、空しい気持ちになった。

ただただ涙を流しながら、漆黒の街と腐った野菜を、交互に見つめ、そして自らのやつれた手も、見つめる。手は、皺だらけだった。林檎には、何時しか蟻が群がるようになって、潤いが無くなり野菜だった名残が日に日に薄れていくのが見てわかるようになった。

「何が綺麗だ。ひどい理屈だった。滅びちまったら、それでおいしいじゃないか」

泣きながら男は、天から黒い雪が零れ落ち始めたことに気が付いた。

黒雪は灰色の空を漂ってから、ふわふわと右往左往してから、男や草原へと降り注ぐ。

「……」

男はそのまま、体育座りのまま、そこでじっと動かなかった。

黒い雪は冷たかったけれど、男は漆黒の海へ視線をやったまま、地蔵のようにその場をわずかも動くことをしない。

やがて、胸へまで黒雪は積もり、そこまで雪が到達すると男は冷たさのあまり、意識を既に失っていた。それでも雪は降り続けて、止まず、男は最後まで埋もれていく。

漆黒の海の中へと、男は滅びる。真っ黒に。埋もれて消えていく。

（後書き）

将来長編にしようとしているものの、男の夢の部分を抜き出したものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496n/>

林檎と明滅

2011年11月13日12時45分発行